寄り添う

外国由来の子どもたちと共に

本当の自分を知ってほしい

この連載も半分を迎えました。今回は小学校高学年から中学生の時期に来日した子どもたちのことをお話しします。彼らも幼少期に来日した子どもたちのように、日本になじむことができるでしょうか。来日年齢は、環境への適応や言葉の習得に大きな影響があると私たちは感じています。

これくらいの年齢の子どもたちは、すぐに友だちができて仲良しになれるわけではありません。母国との習慣の違いにもなかなか慣れませんし、言葉がわからず、伝えたいことが伝えられないことに対するストレスも大きいです。学習の遅れを気にする子もいます。母国では皆と同じようにできていたのに、日本ではクラスで自分一人が「できない子」になります。そんな自分を受け入れるのは難しいようです。私たちの日本語支援の授業は1対1ですることが多いのですが、その時間に彼らは様々な姿を見せてくれます。

アジア圏から来たR君は、当初日本語の発音になかなか慣れることができず、学習が停滞しがちな時期がありました。日本語の学習中に重苦しい空気になってきた時、突然彼が立って黒板の前に行き世界地図を描き、片言の日本語と母語を交えて、国名やその土地の特徴などを話し始めました。その日の日本語の勉強とは全く関係がなかったのですが、私はひとしきりその話に耳を傾けました。

同じくアジア圏のNさん。初めの頃は日本語の学習に抵抗感があり、ひらがなを覚えるのもとても時間がかかりました。ある日ノートも教科書も出さず、黙って母国のダンスを踊り出しました。しばらく授業のたびにダンスを踊ることが続きました。

そういう時、私たちはその時間の彼らの姿を尊重します。彼らが「自分は〝できない子〟じゃない。得意なこともある。こんなことができるんだ!」と訴えているように思えるからです。自分を取り戻せば、また前に進めます。私たちもそうではありませんか?

(松本市子ども日本語教育センターコーディネーター・西尾淳)